



第2図 各県の波板状凹凸面と芯々距離(2)

下記の通りである<sup>1)</sup>。

都城市大島島田遺跡	平均66.9cm
都城市大岩田上村遺跡	平均63.0cm
大分県上野第一遺跡	平均60.6cm
岡山県山伏塚遺跡	平均74.6cm
鳥取県石籠第3遺跡	平均60.7cm
奈良県鴨神遺跡	平均70.8cm
茨城県中台遺跡	平均66.8cm
茨城県古峯B遺跡	平均73.5cm
岩手県曲田I遺跡	平均66.7cm

平均の芯々距離が70cmを上回る例が3例ほどあるものの、熊本県塚原遺跡が81cmであったことを考慮するとそれほど極端な数値ではない。各遺跡の波板状凹凸面の図を同じ縮尺にしてOHP用の透明フィルムにコピーした際に気付いたことであるが、宮崎県前畑遺跡と鹿児島県木場A遺跡例のように重ね合わせと指紋の照合を行う時のように合致する例もある。しかも、九州以外の中国地方・関西地方・関東地方・東北地方でも同じ様な数値が出ており、改めて全国的に波板状凹凸面の芯々距離は共通していることが解る。また、時期的にも古墳時代から近世前半までの長期間に及んでおり、地域的にも時間的にも左右されない不変的な内容を波板状凹凸面は持っていると考ええる。その不変的な内容が、交通手段としての牛や馬の利用であったと考えるのである。

さらに、山伏塚遺跡と石籠第3遺跡の凹面に見られるように、凹面内が左右二つに分かれることも波板状凹凸面の特徴である。これは、青木牧場でも観察できたことであり、牛の左右の足が25cm程度開いているためにこのような形状になると考えられる。

## (2) 絵図資料

波板状凹凸面は当時の人々にとってどのように映っていたのだろうか。路床基礎工事説であれば土木施工中は凹凸面を目の当たりをしているかもしれないが、出来上がった道路面では直接見ていないことになるだろう。一方、枕木・コロ説であれば当時の人も使われている状態を常に見ることになる。このことを確認するには、古代から近世にかけて描かれた絵図資料が参考となる。

多くの絵図資料で、道路と考えられる部分に等間隔の横線で表現したもののほとんどは、坂道であり階段を表している。しかし、階段以外の道路にも等間隔の横線で表現している絵図資料を見出すことが出来た。1597年頃描かれた米沢市上杉博物館蔵の「村上ようがい」図(越後国瀬波郡絵図部分)がそれである<sup>2)</sup>。山頂の山城に登る部分や右上の峠を越える道に描かれている等間隔の横線は階段状の施設か足掛かりを表現していることで理解できるが、左側の水田部分に描かれる同様の表現は階段や足掛かりとは考えられない。現在の地図でも低地であることが解るし、当時も水田が描かれていることから、ほぼ平坦面であったこと